嶋谷市左衛門小笠原巡検 350 周年記念事業　第 4 回事業部会　会議概要

令和７年５月１４日　９：００～：１１：００
　村役場：延島委員、織田委員、上原部会長
　事務局：亀山
　東京事務所：宮城委員、小関委員、アドバイザー柏木先生
　欠席：吉井委員

（部会長）本日の議題は、次第の通り 5 点とする。
　１　部会長以外に進行役を設けることについて
　２　議題提案をＷｅｂドキュメントに書き込むことについて
　３　「むにん、ぶにん」とルビについて
　４　顕彰碑について
　５　その他（次回のスケジュール）

議題１
（Ａ委員）事務局は黒子ではなく、進行の中でも入ってやってほしい。会議録については、要旨を作成するので、各委員に案を作って意見を聞いてまとめてほしい。委員名簿に肩書が書かれていないので入れてほしい。それから、今までの進行で部会長が 7 ～8 割を話している。私は、会議は積み上げだと言ってきたが、最終的には切り捨てられて実行委員会で同じ発言をせざるを得なかった。村のペット条例審議会と同様に、この事業部会の会議でも適切な進行役を設けた方が良いと思う。
（Ｂ委員）現在の進行はバランスが悪いようにも思う。Ａ委員は、会議の中で意見が切り捨てられていると受け止めているということであったので、それを払拭されるようであれば、今のままでもいいようには思う。その後の議事録などでも納得がいっていないという意見もあったので、そこも改善されながらやっていけるならば、それでもいいのかなと思う。
（Ｃ先生）学会の例だが、学会理事会の場合は会長が基本的に議事進行を行い、意見を聞いて調整をしてまとめていくという形がセオリーである。たとえば役所の文化財保護審議会では、会長があいさつをしたあとは、事務局の担当が司会をしながら、ことあるごとに、会長に意見を求めることをしている。あらかじめ会長と事務局が会議の前に打合せを行い、会長が事務局の提案を受けながら、進行をしている。本部会で、もし部会長以外に進行役を設けるならば、部会長と進行役があらかじめ十分調整をしておかないと百花繚乱になってしまう。
（Ｄ委員）時間の使い方として、この場で、ここまで議論することなのか。事前にやっておくべきことではないか。
（Ｅ委員）本題以前のことで、繰り返しているように思う。メールのやり取りの場で事前に解決にむけてやっておいた方がいいことや事前に準備することと、この場で話すことが分けてあった方が話しやすいと思う。議事録は振り返りをするときにも重要である。しかし、短くまとめすぎてしまうと、発言者の意図が伝わらないということがある。
（部会長）私の大きな反省は、第 3 回部会の時に皆さんから意見を求めることをしなかった。意見

を切り捨てることがあってはいけない。そこで、第２回の会議概要の中でも第３回の会議概要の中でも、皆さんからご意見を頂いて修正をし、皆さんに戻している。
今後は、部会長が皆さんからの意見を十分求め、それをまとめるように努力する。議事録も皆さんの意見をもとに改善していく。それが部会長の役目である、ということをお約束して、私の方で議事を進めさせていただきたいと思うが。
（Ａ委員）別に進行役を作らないということについては反対である。
（部会長）Ａ委員の「反対」という意見を議事録に残すが、会が進行しないので、私の方で進めさせていただき、今後、何かご意見があれば、その都度、意見を述べていただくということでいかがか。
（各委員）賛成
（Ａ委員）皆さんが、それで良いというなら、それに従う。

議題２
（Ｂ委員）事前調整がなさすぎて会議の時間がもったいないと感じている。事前に書き込んでもらっておくと会議が進む。メールだと重なる、埋もれる、まとまりにくい、ということがある。皆が書き込めるわけではないとは思うが、できれば便利かなと思っている。
（Ｄ委員）Ｇメールを開けても、埋没してしまって全部開けていかなければわからないということがあるので、このような機能があるというのは便利であると思う。
（Ｅ委員）皆さんの承認なしに始まったので、とりあえず、今回、私は記入することを控えた。「議題提案」という題名でありながら、このやり取りの中でジャッジメントをするというのは避けた方が良い。また、「議題提案」というものとも外れているように感じる。Ｗｅｂドキュメント自体を使うことは良いと思うが、使うならば入力した日付を入れた方がいい。
（Ｃ先生）ＳＮＳの時代なので、今後は、活用していくのがベターであるように思うが、中には使い勝手に迷う人もいると思う。気軽に書き込めるという良さもあるが、どんどんメールが入ってきて埋もれてしまうということもある。書き込む場合は、重要な要件と明記されて書き込むのがよろしかろうと思う。
（Ａ委員）私は、メールの中で、Ｗｅｂドキュメントの対応はできない、と言っている。メーリングリストのメリットは時間に関係なく意見を送ることはできるところである。私は、メーリングリストで今まで意見を述べてきた。それに加えてＷｅｂドキュメントがあると、私は対応できない。
（部会長）一通り意見をいただいたが、Ｂ委員、確認だが、これは「議題提案」となっているが、みんなで話題にしたいことという趣旨かなと理解したが、そういうことでよろしかったか。
（Ｂ委員）その通りである。決してジャッジメントをするものではなく、あくまでも意見の抽出である。
（部会長）ということで、ここで書いたから、ここで決めるというよりも、この人はこういう考え方をもっているんだなあということを、この場で一人一人発言しなくても、書いてあればだいたい理解できるということをねらったものだと理解した。
　Ｄ委員からも、メールだと、いつのメールかわからなくなってしまうことがあるので、かえってこういう機能は便利ではないか、という意見もあったが、Ａ委員からはちょっとそれは負担で

ある、それはできないので従来通りメールで意見を書き込む形で対応したい、という意見であった。せっかくのＢ委員からの提案もあるので、話題にしたいこと、意見交換の場としてＷｅｂドキュメント残しておく、ただし、これに全員書かなければならないというものではない、ということでよろしいか。

（Ａ委員）私は見れないと言っているのである。それに対してＷｅｂドキュメントで議論をやっているとすると、私は取り残されることになる。その辺のカバーはどうしてくれるのか。

（部会長）Ａ委員から従来通りメールでご意見をいただくと、事務局でそれをＷｅｂドキュメントに張り、それをメールでお返しする、ということではどうか。

（Ａ委員）従来のメールとＷｅｂドキュメントと、二つに分散してどちらに議論のデータが置かれているか、ごちゃごちゃになってしまう。だから、私はメールだけにしてほしいと思う。

（Ｂ委員）Ａ委員は、今まで通りメールで意見を発信して、メールだけだとわかりづらい人もいるので事務局でそれをまとめ、このようにまとめましたと事務局でドキュメントのＵＲＬを流してくれれば、メールに埋もれがちな人はメールではなく、そこをまとめて見ればいいので、そういうハイブリッドな形にすると落ち着くのかなと思う。

（部会長）では、今日現在は、Ｗｅｂドキュメントを活用してみるが、その中に書き込まなくても大丈夫である。書き込まれた内容で決定するということもない、何か書き込みたいことがあったときは書き込むことができる、無理のないところで進めてみる、ということでどうか。

（Ｂ委員）とりあえず、まずはやってみて、そこでなにか「バグ」が出れば、そのときにまた考えればよい。

議題３　むにん　ぶにん

（Ａ委員）私が言っているのは、一般論として古文書にはふりがなが振っていない。だから、「むにん」と読んだか「ぶにん」と読んだかわからないという意見がある。だけど、ふりがなが振ってある文献がある。その中に、「むにん」と振っているものがある。「ぶにん」というふりがながある文献には私は出会っていない。それから、「むにん」と「ぶにん」とでは意味が違う。「むにん」とういうのは今でいう無人島のことであり、「ぶにん」は、中国語には「ぶにん」という言葉はない。これは、日本に漢字が入ってきて「ぶにん」という意味が後から付け加えられた。「ぶにん」というのは人手がないとか、人がいなくて寂しい、という意味で使われている。それを私は随分前に論文で発表している。その辺の整理がないまま、「ぶにん」という言葉があるのだという、そういうふうに呼ばれていたという通説・俗説だということで、その通説・俗説には根拠がない、ということを私は言っているのである。それに対する反論がないのに、なぜ「むにん」というふりがなは付けない、という結論になるのだということを言っている。

（Ｅ委員）「Bonin」の語源の話と古地図内に書かれた「無人嶋」の読み方の話は別である。「Bonin」の語源となったのが「ブニン」であったのではないか、という話と、「無人島」と書いて何と読むか、古地図での読み方という話は、全く別の話である、と認識している。

「むにん」と読んだのではないかということについては、良いのではないか。

（Ｂ委員）私は、岩本さんの話も含めて、こういう話があって、現段階での見解はこういう話があるよ、というように載せればよいのではないかと思う。ルビを振る振らないで言えば、昔の文書にはルビが振られていないのが多いので、あえて振らず、振らなかった意味はこういうことだよ、

ということをパンフレットか何かをつくるときに、そのことに触れれば良いのではないか。今後、新たな事実が出てくるかもしれないので、断定はしないで今の段階ではこうですよということを言えば良いのではないか。

（D委員）自分でガイドをするときには、自分で裏をとっていないことには、そう言われています、とか、諸説ありその中のひとつはこうです、という言い方をしている。自分で裏が取れて、当時、存命だった方に話が聞けた時には、きちんと、こういう方がこのように話されていましたといういい方をしている。「むにん」「ぶにん」など、なぞめいたミステリーがあっても、観光的には楽しいかな、と思う。ロマンがある。はっきりしているならはっきりしていると言ったらいいが、わからないことはわからないと言った方がいい。

（C先生）どれ一つをとってもこだわるということは重要なことである、と認識をしている。実際に文章を読むときに、「無人島」と書いてあるのをどう読むかについては、ルビをつけるのがよいかと思うが、私が調べたかぎりでは、どちらでもよいのかなというような結論になる。なぜかというと、嶋谷市左衛門小笠原諸島巡検 350 周年事業であるならば、嶋谷市左衛門が生きた時代は何と読んだのかということを知らなければならないが、文献をさかのぼっても、残念ながらそこまで結論がでない、ということなのである。というと、私が前々から申し上げている通り、歴史学の研究において、あやふやなことは書くな、無理にこうこうであると付けることについては慎重になれ、資料的根拠を探せ、と私自身、教えられてきた。だから、「むにん」「ぶにん」についても、あえてルビを振る必要はないのではなかろうかと考える。もし振るならば、D委員が言うように、ある文献を参考にすると・・・」などという形で、回りくどい言い方になってしまうが、ルビをつけるということもありうる。しかし、石碑や説明板にあえてルビを振るかというと、その必要はない。今後、歴史学者が見たときに、「・・・だと思われる。」的な回答をすると、それでは答えきれない。仮に説明板を付けて英語表記にするときは、「無人島」を外国表記である「BONINISLAND」と訳して付けてあげるのがよろしかろう。何度も繰り返すが、あやふやなことは書くなという姿勢であればよろしかろうと思う。

（部会長）嶋谷の時代に何と読んでいたかというとはっきりしない。しかし、「むにんとぶにんは、江戸時代には違って意味で使われていた」、というのはすとんと理解できたので、「むにんと言われていたように思われる」ということを言っても良いのではないか、という気はする。しかし、ルビについては、実行委員会、部会として今後、発出する文書の中で「無人島」に全て「むにんしま」とルビを振るかというと、それは違う気がする。今後、何か村民だよりか何かの折に、「当時はそのように言われていたように思われる」という表現を使いつつ、「むにんしま」もしくは「むにんじま」と読むのが適切であると思われる、ということを載せるというのでいかがか。

（B委員）それでよいと思う。

（A委員）神奈川大学の杉本先生は、「むにん」とふりがなをしている。私は二次資料の国語辞典に当たっただけだが、杉本先生は一次資料をもとに指摘している。部会長は、＜議題提案　参考資料＞の中で、「p25　レミュザが 1829 年に書いた論文と無人島地図にはブニンシマ　とカタカナでルビが振られています。」と書いてあるが、それは本当か。いままで、それを指摘した人はいなかったので、それは大変な発見である。ただ、カタカナというものはいつ知られたか、日本語では平安時代に漢字が宮廷の女性たちによって書き換えられてひらがなが生まれた、カタカナというのは全く

別で、僧侶が仏典を読むためにふりがなを振った、それを角筆という、それを「ツノフデ」ともいうが、水牛の尖った先で和紙にふりがなを振った、それは墨のように見えなくて、よく見ると、和紙に刻み込まれているのでふりがなが読める、それが一般的になったのは明治になってからで、明治になってルビを振るというのは文字が細かいので、文字を、当時は西洋式の印刷ではなく木版印刷がおこなわれており、当時、小さなふりがなをつけるのが大変なことなのでカタカナを振るようになった。そこで、カタカナのルビが振られていることをフランスの東洋学者は知らないわけで、いつ振られていたのか、が大変に疑問に残る。後から振られた可能性が高いと私は思う。

（Ｅ委員）レミューザが２回目に書いた論文に付けている地図に書かれている。ただし、その読み仮名をレミューザが書いたかどうかは断定できない。

（部会長）誰かの図を写して、誰かが加筆しているかもしれないし、本当に分からないことばかりで、だから、「・・・と思われる。」としか言えないのではないかと思う。いずれにしても、繰り返しになるが、私共としても「無人島」を何らかの形で表現しなければいけない訳であるので、「むにんしま（むにんじま）」と読むと思われる、ということについては皆さんからそれは困るというご意見はなかったかなと思うので、これでいきたいと考える。一方、何が正しいかが分からない中で、全部、「無人島」に「むにんしま」とルビを振っていくのかについては、それも違う。あえて、ルビを振る必要もないと思われる。しかし、読み方については、今後、村民だよりなど、どこかで発信していく、ということが、私共ができることかと考えるがいかがか。

（各委員）賛成

（Ｅ委員）岩本論文を少し補足をすると、岩本論文ｐ7『無人島の読みについて、平野は「ムニンシマ（もしくはムニンジマ）の読みを確定したい」と述べている。1848 年に刊行された『伊豆七島全図附無人島八十嶼図』における「無人島」の書き出し部分に「無人島ムニンシマ、一名小笠原島ヲカサワラシマ」とふりがながあったとし、ブニンやムジンではないというのが平野の指摘である。このフリガナについては、その後、小笠原調査隊に加わった阿部礫斎の知識によるものであった可能性が高いとしている。』というところまで、岩本は書いているので、誤解のないようにお願いしたい。ブニンという言葉がカタカナで出てくるものとしては、田辺太一氏が転訛説をとなえたときの原文の中に岩本論文ｐ8『「我国にて無人嶋とよべるムニンの転訛せしものにて・・・」と書いてあるので、はからずもこの時代には無人島を田辺氏がムニンと読んでいたことが明らかになっていることから、この時代には「むにんしま（むにんじま）」と呼んでいたと考えられることがわかる』、ということまで岩本は書いている。

（Ａ委員）田辺はブニンとは書いていない。

４　顕彰碑

（事務局）小花作助の記念碑を一例として示し、現在、アポを取っている業者３社に同様の碑を製作した場合の見積もりを出してもらい、その額や逆提案された内容で決定するという方法でどうか、と思う。現在、アポを取っている業者は、

A　一粒工芸 株式会社

B　石六 有限会社

C　信州松本の杉本さん

（Ｂ委員）杉本さんは戒名彫刻を専門にやっている方で、石を購入するにあたっては石屋とつない

でやっていく、ということで話を聞いている。見積もりにあたり、石をもってくるところまでの費用なのか、最後に設置までの費用なのか。それと、杉本さんとの話の中では、逆にいくらの予算でやってくれと言われた方がやりやすい、ということであった。その中で、石の大きさも質も含めて考えられる、とのことであった。私も小花と同じようにはめ込み式で良いかと思っている。生成画像で記念碑モデルを作ってみた。これだと大きくて予算オーバーかなとは思っているが、こんな感じでできればよいのかなと思っている。そして、解説板を横に設置し、今後内容が変わってくればそこを差し替えて、というのが良いと思う。

（部会長）業者に依頼するのは、石を手に入れるところから移送するところまでではないか。整地、設置は地元業者の方がよい。とすると、場合によっては、移送から碑の制作業者と地元業者での話し合いが必要になって来ると思われる。

（Ｂ委員）業者には竹芝で船に乗せるまでの見積もりが良いでだろう。
加工する手間がかからなければコストは安くなるものなので、なるべく加工しなくてすむものならばそれが一番良いし、土台すら現地でコンクリートで作ってしまえば、石を運ぶよりは安いかなと思われる。

（Ａ委員）本村の議員が与那国島の記念碑を見てきたそうだが、現地の珊瑚礁を使っていた。そこに日本最西端の板をはめ込んでいる。これは、凄く安い作り方だと思う。私は、いくつか提案をして、奥村運動場の珊瑚石、母島のロース石、あるいは母島の貨幣石、扇浦の小花の時もそうしたよう八丈島の石をもってくる、そういうことを今までも提案している。そして、その前提として、碑と解説文を別々に作るという話になっているようだが、私は一体型が良いと思っている。この点も整理してほしい。それから、そもそも、どこの場所がいい、ということについては、Ｅ委員からも新しい提案があったが、いままでにいろんな場所の提案があり、評価を委員会でやるために、評価表というものを作ってほしい、そこには国立公園の規制、保安林の規制、所有が村なのか東京都なのか国なのか、安全性、などについて評価項目を作って、ここはどうか、ということを客観的に見える化して議論を進めたい。

（Ｂ委員）文字の数が増えれば増えるほど、コストは高くなる。解説板で作るとなると、石を削るよりコストは下がると思う。自分は今回の予算では、一体型は厳しいと思う。奥村の珊瑚の石を使うとか、ロース石を使うとか、島で石を工面するというなら、島で加工はできると思う。

（Ｄ委員）私の記憶では、石の方は、嶋谷の碑というだけにして、細かい説明は説明板にして、今後新たな歴史が明らかになったときにはそれを付け替えればいい、という意見が出ていたように理解しているが。

（Ｂ委員）そういう意見が出ていたが、決定はしていなかった。

（Ｄ委員）皆さん、賛成していたかと思っていた。

（Ｅ委員）予算ありき。物価高が叫ばれている中、記念碑に高すぎる予算が使われていると感じられれば、あまり歓迎されない。今回の顕彰事業は誰に１番知ってほしいかというと島民であり、あまり「えっ」と思われるような碑はふさわしくないと考える。親しみのもてる碑、親しみのもてる場所、というのが私は良いと思う。

（Ｃ先生）村民の方々の歴史に対する親しみをもっていただけるもの、予算の範囲内のもの、母島のロース石を使うということも念頭において検討することが大切である。一体型にすると、解説を多く書き込むことができなくなる、また、読みづらくなるということがある。別置にすると、

書き直す、立て直すことが可能である。解説板についてだが、谷中霊園の小花作助の解説板を見ると東京都が作ったものであり、東京都は同じ形式で年間に何例も設置しているので、東京都に問い合わせててみると、コスト的に安く作れる可能性があると思われる。
（Ｄ委員）記念碑の材料は石でなければならないのか。
（部会長）別に石にこだわっている訳ではない。
（Ｄ委員）今の時代は、村民は、わあ、大きくて立派な記念碑だなあ、と喜ぶかと言うと、なんでこえば祠の形にするとかいうのもいいのかなと思ったりする。
（部会長）今日のところは、碑と解説については、コストの問題、その後の読み易さ読みづらさ、などの問題もあるので、別にするということに決定ということでよろしいか。
（Ａ委員）私は一体型で、と言っている。
（Ｂ委員）私は、コスト的にもあとのメンテ的にも良いと思っているので、別がいいと思う。
（部会長）今日のところは、多くの意見は記念碑と解説板を分ける形、ただし、Ａ委員は一体型がいい、というご意見があったということでまとめたいと思う。
（Ｂ委員）碑を置く場所の比較表を作る、見積もりを出して一体型にする、解説を別にするという比較表をつくって皆で議論する、その比較表を今月中に作る、ということをしてほしい。これが年内にできあがるぎりぎりである。石屋にはこれくらいの予算ならどれくらいのものができるか、という提案をしてもらった方がいい。そして、地元業者の比較表がほしい。
（Ｄ委員）島の業者がいくらかかるか決まらないと、内地業者にいくらで頼めるかがきまらないのではないか。
（部会長）事務局でも、いろいろと検討している。こちらのデータを皆さんにも公表していく。

議題５　今後のスケジュール
（部会長）Ｂ委員の調整によると、今月、次に集まりやすいスケジュールは 5 月 26 日の 10 時からであったが、いかがか。
では、第 5 回部会は 26 日にお願いする。
（事務局）では、次回は２６日、よろしくお願いします。以上で第 4 回事業部会を閉会する。